



大阪大学 埋蔵文化財調査室ニュースレター

Osaka University
The Office of Archaeological Heritage Management
News Letter

HP:<http://www.let.osaka-u.ac.jp/maibun/index-maibun.htm>

第8号 2012年7月

埋蔵文化財調査室とは

大阪大学豊中キャンパスや吹田キャンパスの地下には、古墳や集落跡が眠っています。そのような遺跡やそこから出土した遺物は、文化財保護法の規定により、国民共有の財産として保護・活用をはかる対象とされています。

しかし、埋蔵文化財は、開発により常に破壊の危機に瀕しています。大阪大学では、キャンパス内の遺跡の保護と建物計画などの調整を行うために、埋蔵文化財調査委員会を設置しています。その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が遺跡の調査やその活用にあたっています。

待兼山遺跡

待兼山丘陵は、考古学者の間では戦前から考古資料の出土する地区として知られていましたが、1983年、理学部アイソトープセンター建設の際に、弥生時代の集落跡が発見され、丘陵一帯が「待兼山遺跡」として国の文化財台帳に登録されました。その後、埋蔵文化財調査室の調査によって、弥生時代から近世に至るまで様々な考古資料が見つかっています。



待兼山遺跡の主要な遺構

待兼山山麓に広がる墓域

待兼山周辺は、埋蔵文化財調査室の調査によって、古墳時代から奈良・平安時代、中・近世にいたるまで時代を超えて墓域として利用されていたことが判明してきました。

現在、阪大坂下の駐輪場となっている地点では、5世紀の古墳（待兼山5号墳）とともに13～15世紀の火葬墓群が発見されました。この火葬墓群は、火葬場に加え、人骨片や遺灰、棺に使われた釘などを廃棄した火葬灰集積土坑、選骨後に埋納した火葬墓や石組み墓といった遺構が発見され、比較的大規模な墓域であったことが判明しています。

日本における火葬の始まりは、西暦700年の僧道昭の例からであると伝えられています。以後、奈良時代に普及した火葬ですが、平安時代になると下火となり、中世に再び採用され、普及するようになります。ただし、火葬で葬送された人々は、社会の中でも比較的有力者であったと考えられています。

2011年5月から6月にかけて実施した総合学術博物館修学館の北側における発掘調査でも、土器棺や火葬墓が発見されています。

調理用土器である鍋形土器が正置した状態で出土した土器棺は、その形状から8世紀のものであることがわかります。土器内部に人骨などは発見できませんでしたが、火葬後に納骨を行ったか、乳幼児の墓である可能性が想定できます。

土器を用いた棺は、阪大坂中腹でも発見されており、奈良時代より連綿と待兼山周辺が墓域として活用されてきたことがわかります。

火葬墓は、土器棺から4mほど離れた地点から検出されました。焼土塊、炭、骨片が伴っていたことから、この場所で火葬がなされ、人骨の一部が残存したものと考えられます。残念ながら、時期を特定する遺物がなかったために、時期比定は難しいですが、待兼山山麓における火葬墓の範囲がさらに広がることが判明した意味において貴重な調査事例となりました。

待兼山周辺から出土した火葬墓の遺物は、現在、大阪大学総合学術博物館・待兼山修学館3階にて展示されています。



待兼山5号墳・火葬墓群の発掘調査



修学館北地点の発掘調査



修学館北で発見された土器棺



火葬墓の検出（指差しているのは人骨片）

吹田キャンパスにおける遺跡の発見

大阪大学吹田キャンパスでは、これまで遺跡の存在は知られていませんでした。しかし、2009年7月、テクノアライアンス棟新棟建設予定範囲において、試掘調査を実施したところ、瓦片・須恵器片等が発見されたために、埋蔵文化財が包蔵されていることがわかりました。山田丘遺跡と名付けられたこの遺跡は、2009年9月29日～10月30日にかけて発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、近世以前にさかのぼる確実な遺構は検出することはできませんでした。しかし、調査区からは多数の瓦片と18世紀後半に属するとみられる陶磁器類、そして9世紀の須恵器などが検出されており、この地点周辺には平安時代や江戸時代の遺構・遺物が遺存している可能性が高いといえます。山田丘遺跡の所在している場所は、「斎殿」という古い地名が伝えられている地区でもあり、神仏を祀る殿舎などが周囲に存在した可能性もあります。

出土した陶磁器類のうち、すり鉢（右手前の2片の土器）は外面が暗褐色、内面は赤褐色で焼き締まっており、3mm程度の石英・長石を含むといった胎土で作られています。こういった胎土は丹波で作られたすり鉢の特徴であり、丹波産であると推定できます。平安時代の須恵器は小型の壺が出土しています。その特徴から、大阪府堺市に所在する陶邑窯産か京都府亀岡市の篠窯産であることが想定されますが、吹田キャンパス付近に窯跡が存在した可能性も想定できます。出土した遺物は、当時の生活の一端を示す資料となります。

吹田キャンパスでは、キャンパス造成時以前の旧地形などがよくわかっていません。今回の山田丘遺跡を契機として、今後、継続的な調査によって吹田キャンパスにおける埋蔵文化財の状況を把握することが必要です。埋蔵文化財調査室では、箕面キャンパスを含めて、未知の遺跡の確認にも努めていきたいと思っております。



山田丘遺跡の位置



山田丘遺跡の出土遺物



山田丘遺跡の発掘調査

普及活動・刊行物

普及活動

埋蔵文化財調査室では、日々の埋蔵文化財調査・研究に加え、普及活動にも力を注いでいます。2011年度から最近にいたるまで、下記のような普及活動を実施いたしました。

- ・ 21世紀懐徳堂 i-spot 講座にて中久保助教が発表
(2011年6月28日)
- ・ JICA・国立民族学博物館 2011年度博物館学集中コースの個別研修で埋蔵文化財調査室の活動を紹介しました
(2011年8月26日)。
- ・ 28史遊会(大阪府高齢者大学校・28期歴史考古学科OB)の方々に大阪大学総合学術博物館・待兼山修学館の展示を解説しました(2011年10月4日)。
- ・ 池田郷土史学会にて中久保助教が発表しました
(2011年10月9日)。
- ・ 兵庫県立須磨友が丘高等学校で出張講義を行いました
(2011年11月9日・16日)。
- ・ 21世紀懐徳堂 アカデミックッキングにて中久保助教が講義しました(2011年11月18日)。
- ・ 旧制浪速高等学校同窓会、第491回浪高午餐会にて、中久保助教が旧制浪速高等学校の地下に眠る待兼山遺跡を紹介いたしました(2012年4月7日)。

今後も、最新の発掘調査成果をふまえた普及活動に、尽力していきたいと思っております。

刊行物

2011年3月には、山田丘遺跡の発掘調査内容と近年の埋蔵文化財調査の実績をまとめた『大阪大学埋蔵文化財調査年報』2を刊行しました。

今後も、調査を継続して実施し、研究成果を公表していきたいと考えています。

編集・発行:大阪大学埋蔵文化財調査室(室長 永田靖)

〒560-8532

大阪府豊中市待兼山町1-5

電話・FAX番号:06-6850-5106

電子メール:nakaku68@let.osaka-u.ac.jp

